

「幻華遺影」のデジタル化にあたって

母方の祖母（倫子）は、私が生れた時「昭和二四年」は、勿論、もうこの世には居なかった。下松の造り酒屋に生まれ、縁あって岩国・教蓮寺に嫁いだ。しかし、十年後に結核を患い、故郷で闘病生活を送ったが、帰らぬ人となった。愛する夫と二人の子どもを残しての旅立ちで、胸の張り裂ける思いであつたらう。：ただこれだけのことであるなら実に虚しい。

幸い祖父（淡水）が、発病から、闘病生活、死に至るまでの一部始終を記録し、二人の間で交わされた手紙や、日誌、短歌等を編集して小冊子にしておいてくれた。この冊子の原本は無いが、母（百合子）がそのコピーを保管していた。

この度、祖父の五十回忌に当たり、その記録を長く後世に残すことと、もっと広く有縁の人々に伝える意味から、もう一度、その文章を打ち直してデジタル化することにした。

私的なことであるが、私は幼い時から、厭世的であつた。この世に生れてきたことを何度も、疎ましく思った。それは自尊心の高い割には、自分の能力や気力がそれに伴わないためであつたり、自分の人生が、思い描くようにはなかなか行かないためであつた。それでも、今日まで何とか生きて来られたのは、お寺を護らなければならないという使命感であつた。

住職として、仏書を読み、聴聞もするが、自分が本当に信心をいただいているのか、お法を喜んでいいのか、今も、煩悶する日々であるが、この「幻華遺影」を読むとき、祖父母の苦悩にふれるとき、何か癒され、背中を押されるのである。弥陀の大悲は、決して、堂々と、胸を張って歩めるもののためにあるのではなく、あつちにはぶつかり、こつちにはぶつかり、弱弱しく、たどたどしい歩みしか出来ないこの私のためにあるのであると。

この世では、なかなか思うようにはならなかつた祖父母であるが、今はお浄土にて、こころ安らかに、私たちのことを見守ってくれていることと

思う。いつか私も、懐かしい祖父と、まだ見ぬ優しい祖母のもとで、この娑婆世界のいろいろの出来ごとをこなして見たい。その日が来るのを楽しみに、もうひと頑張り、人生を歩んで行こうと思う。

平成廿三年五月七日

願船院釋淡水法師の五十回忌法要にあたって

浄蓮寺住職 末武一行